

# 地域におけるパイプオルガンの役割

—コミュニティにおけるメディアとしての視点から—

The role of pipe organs as a medium from a community perspective

大木 裕子\*

OKI Yuko

## 要旨

我が国で急速にパイプオルガンが普及するようになったのは、バブル景気に沸いた1980年以降のことであるが、高額な大型楽器であるパイプオルガンは必ずしも費用対効果をもたらしていないのではないかと批判の対象ともなってきた。そこで、本稿では導入されたパイプオルガンの楽器としての価値を最大限に活かしながら、いかにして地域コミュニティのメディアとしての役割を果しえるのかについて考察する。本研究では、伊丹市立サンシティホールと福岡日航ホテルの2つの事例研究を実施するが、これらは公開資料及び詳細な関係者へのヒアリング調査に基づき分析されている。

伊丹市立サンシティホールのベルギー製パイプオルガンは1993年に設置された。公立施設ではコンサートホールに設置されることが多いパイプオルガンが、高齢者福祉施設であるサンシティホールに導入されたことで、これまでにない形で市民の文化的生活の核となることが期待されていたが、修理にかかる財政面の負担と施設ミッションの見直しにより、パイプオルガンの譲渡が検討されている。

ホテル日航福岡のパイプオルガンは、1999年にホテル内チャペルに設置されたフランス製で、主に結婚式を取り行うチャペルとしては珍しい本格的な大型楽器である。チャペルの建物も本物志向で荘厳な雰囲気を醸しだし、福岡では憧れの結婚式場であると同時に、積極的なコンサート活動が繰り広げられ、地元の文化水準の向上に大きく貢献している。

この2つの事例からは、パイプオルガンという楽器は導入するのに高額な投資が必要とされるばかりでなく、修理や維持管理にも相当な費用が発生すること、そして一度設置すると移設も困難な楽器としての機能を最大限に活かすためには、プロフェッショナルの関与と権限が必要であることが理解された。パイプオルガンは固定楽器であるからこそ、メディアとして地域との交流を図ることで楽器としての価値を上げ、コミュニティにおける存在意義を高めることができる。音楽と楽器と人々を有機的に結びつけるためにも、オルガニストにはプロデューサーとしての包括的な能力が必要とされる。

キーワード：地域コミュニティ 音楽ホール 教会音楽家 オルガニスト プロデューサー

---

\*東洋大学ライフデザイン学部健康スポーツ学科 Toyo Univ. Faculty of Human Life Design  
連絡先：〒351-8510 埼玉県朝霞市岡48-1

## 1、はじめに

我が国では1980年代以降、公立文化会館として多くの芸術各分野の専門ホールが開設されるようになった。特にバブル経済期には、「都市部ではシティーセールスの一環として、地方では若者離れを食い止める策として」<sup>1</sup>、情報発信の拠点としての文化施設に注目が集まるようになった。こうした中でパイプオルガンという楽器がブームとなったのは、NHKホール（1973年）、サントリーホール（1986年）の開館をはじめとして、箱物行政とも揶揄される公共施設の建設ラッシュに伴い、全国各地にパイプオルガン付きのコンサートホールが設立されたことが契機となっている。宗教上の「儀式的伴侶」<sup>2</sup>として、教会音楽の発達と共に設置が進められてきた欧米諸国とは異なり、我が国でパイプオルガンが設置されている場所はキリスト教の教会やカテドラル、ミッション系の学校や大学はもとより、コンサートホール、公共施設、デパートなど多岐に渡る。主なものだけでも、千を超えるパイプオルガンが確認されている（添付資料 図表3を参照のこと）。

我が国に設置されたパイプオルガンについての研究は、楽器の建造法やメカニズムの歴史的推移（秋元 1982、2002、辻 2007）、音響学（村田 1983、吉川 1991）、文化史（赤井 1995）からの視点や、楽器選定に関わる政治的視点（草野 2003）などがある。特に、建造物一体不可分である特性から、パイプオルガンは建築や音響の分野で着目されてきたが、その設置数の多さに比して、公共施設への高額な楽器導入の必要性や維持運営に関する諸問題、地域コミュニティとの関連性などが十分に研究されてきたわけではない。パイプオルガンは多彩な音色を有する大型楽器であるが、いったん設置すると移動が難しく「建築物に固定される」<sup>3</sup>ことから、その地域を中心としたコミュニティにおいて、楽器として人々のコミュニケーションのメディア（媒体）の役割を担うべき存在でもある。宗教と切り離される形で各地に設置されるようになった我が国のパイプオルガンは、宗教による地域凝集性とは異なるミッションを持ちつつ、地域との関わりの中で、奏でる大音量で荘厳な音楽により人々の生活に豊かさを加味し、集う人々の交流の場としてコミュニティの文化的核となることが求められている。公的施設において税金が投入された楽器であれば、尚更のことである。

そこで本稿では、地域コミュニティにおけるパイプオルガンの役割について問題提起する。豪華なパイプオルガンを導入して地域創生に貢献してきた官民の事例を紹介することで、我が国におけるパイプオルガンの存在意義とその役割を明らかにするための糸口を探る。

## 2、オルガンの歴史と特徴

パイプオルガンとは、リコーダーと同じ発音原理の「フルーパイプ」（パイプの歌口を流れる風で音を生じさせる）と、シングルリードを用いるクラリネットにも似た発音原理の「リードパイプ」（薄い真鍮板のリードの振動で音を生じさせる）の2種類に分類できるパイプに、「ふいご」から風を送り込んで鳴らす鍵盤楽器である。通常の管楽器とは異なり、一本のパイプは一つの音高しか出せないため、一つの鍵盤に一本ずつパイプが必要となる。すなわち、一つの音色に対して鍵盤の数だけのパイプが必要となるが、オルガンはさらに様々な音色のパイプ列を持っているため、パイプの数は膨大な量になり、他にはない巨大な楽器となる。そのパイプ列を選択する機構「ストップ（stop：必要な

いパイプ列への風の供給を止める意)」を操作することで、多彩な音色と壮大な音量を持つことが、パイプオルガンの最大の特徴であり、楽器の王（ドイツ語では女王）」に例えられる所以である。

このようなパイプオルガンと言え、現在では教会の楽器というイメージが強い<sup>4</sup>が、楽器の起源をたどると、最初からそうであったという訳ではないことがわかる。「オルガン」という楽器名の語源は、ギリシア語“ὄργανον (organon)”（道具・機関の意）であり、4世紀頃から管（パイプ）に空気を送ることで音を出す楽器の名称としても使用されるようになった<sup>5</sup>。その起源には諸説あるものの、世界最古の鍵盤楽器であるオルガンは、ヘレニズム期の紀元前3世紀頃にアレクサンドリアで発明された水力オルガン「ヒュドラリウス hydraulis」<sup>6</sup>が原形である、というのが定説となっている。オルガンは古代ギリシアで好んで使用され、儀式の際の演奏のほか、劇場、競技場、祝宴の場に設置されていった<sup>7</sup>。こうして、オルガンという楽器はギリシア・ローマを経て、欧州全域に広まっていった。

このようにオルガンは、古代世界においては権力の象徴でもあり、高価な美術品として扱われる側面を持っており、中世初期のヨーロッパ社会の形成の黎明期にはその傾向がひきつがれていた。しかし、他の楽器が「世俗的」とされるなか、聖歌と共に9世紀頃からオルガンは教会で用いられるようになった。これには、9世紀に文化教育活動に熱心であったベネディクト修道会が大きく貢献している。キリスト教の普及活動と共に、修道院にオルガンが設置されはじめ、11世紀にはパイプオルガンが各地の修道院に普及していった。13世紀末までには大聖堂にも大規模な楽器が設置され、教会ではオルガンが本格的に活用されるようになった。実際に、ルネッサンス音楽の発祥地であるイタリアの諸都市では、1400年代からパイプオルガンが存在していたことが確認されている。

ルネッサンス以来、イタリアのオルガンは単一鍵盤であることを特徴としていたが、アルプス以北のドイツ、フランスなどでは、1500年頃から、現在の形態のような複数の鍵盤をもつオルガンが増え、新しいストップが考案されるようになった。そして、この鍵盤ごとの多彩な音色の対比的性格は、対比の美しさを特徴とするバロック期における音楽様式の発展と合致して、楽器として飛躍的に発展する大きな要因となった。

こうしてパイプオルガンは、地中海からイベリア半島へ、アルプスを超えてフランス、スイス、オーストリアへ、そしてハンザ同盟の交易を通してオランダ、ドイツからスカンディナヴィア半島やロシアまでのバルト海沿岸諸国、イギリスなど欧州全域に広がり、各地の宗教、民族的嗜好や社会習慣などにより異なる展開を見せていった。そして、17～18世紀のバロック時代には、他の一般的音楽においてもヨーロッパ各国で固有の様式が発展したように、パイプオルガンは教会を中心に、楽器も音楽様式もそれぞれのスタイルが確立され、各国の地政学的・経済的全盛時代に、その頂点ともいべき巨大で美しい名器が誕生した。

バロック時代に頂点を極めたパイプオルガンも、18世紀後半の古典派時代には、ソナタ様式にふさわしいオルガン音楽の発展を見ることができず、そこにフランス革命期からナポレオン時代にかけて、戦争や革命による破壊等も相まって、音楽的にも楽器的にも発展が停滞する時代があった。しかし、19世紀にロマン派になると、メンデルスゾーンによる「バッハ復興」をきっかけに、オルガン音楽も復興し始め、ドイツ、フランスを中心に、各国の個性を生かしたオルガンが新たなスタイルを確立する発展を遂げた。これらのオルガンは、その時代の巨大化していくオーケストラを模倣するような響きを求め、ロマンティック・オルガンないしはシンフォニック・オルガンなどと呼ばれている。

一方で、産業革命によって交通網通信網が飛躍的に発展を遂げる中、パイプオルガンにおいても地域的な個性が失われ国際的な規格化が進んでいった。

ロマン派が終わり、第一次大戦を経ると「オルガン運動 (Orgelbewegung)」の名のもとに、バッハやバロック時代のオルガンを理想とする動きが起こり、オルガンはロマンティックのスタイルから、バロックを志向するスタイルへと変化していた。また、一方で電気技術の発展とともに電気モーターを使用した送付装置やコンビネーションなどの演奏補助装置が発展し、演奏の利便性を求める傾向も強くなった。

しかし、残念ながら1970年頃まではバロック時代に対する歴史的検証が不足する中、必ずしも正しくバロックを再現できず、粗悪な「ネオバロックオルガン」が多く建造されることとなった。もっとも、音楽のジャンル全体における歴史的検証に基づく演奏スタイルの発展とともに、パイプオルガンの建造法研究も飛躍的に発展することになった。

こうしてヨーロッパ各地では、バロックオルガンに限らず19世紀ロマン派のオルガンも含め、「ネオバロック」化してしまったオルガンを、過去の最良の状態に修復、復元する動きが1990年代から現在に至るまで飛躍的に進んでいる。日本のオルガンも同様の傾向を持ち、1990年頃まではネオバロック的なオルガンがドイツを中心としたヨーロッパ各国から導入されたが、1990年以降は歴史的検証に基づく各国のバロックやルネサンスのスタイルでの個性的なオルガンや、多様な音楽演奏が求められるコンサートホールでは、それにふさわしいシンフォニックなオルガンが多く建造されている。

### 3、日本のパイプオルガン

日本ではキリスト教の伝来とともにパイプオルガンも持ち込まれ、安土桃山時代には各地の教会でミサのために用いられ、セミナーヨを中心にオルガニストの育成もなされていた。天正遣欧使節においては千々和ミゲルが卓抜した奏者として知られ、ローマ教皇訪問に際し、御前演奏をした。現在、千々和が演奏したといわれる楽器 (1560年建造) がポルトガル・エヴォラの大聖堂に現存し、往時の響きを伝えている。

このようにパイプオルガンは国や時代により制作技法も異なるため、オルガンを建造する際には、どのようなタイプを設置したいのかの理念を明確にする必要がある。明治以降の日本におけるオルガンの導入も、ヨーロッパにおけるオルガン製作の変遷の流れの中にあった。第二次世界大戦前までは、ヨーロッパではネオバロックの運動があったものの、主に英米系の19世紀ロマンティック・オルガンの流れを汲むオルガンが導入され、東京藝術大学旧奏楽堂や東北学院、青山学院などに設置されたオルガンは、移設されたものもあるが、現存している。戦後は高度成長期を経て、1970年に万国博覧会オルガンコンクール開催されて以降、各地にオルガンが増え始め、NHKホール、東京カテドラル、国際基督教大学などでオルガンコンサートが開かれ始めたことは、極めて重要な変化であった。

そして、1990年頃までは主にドイツを中心とした「ネオバロックオルガン」が設置されていったが、一般音楽における古楽や歴史的奏法の普及の流れと時を同じくして、歴史的検証に基づくオルガンが、大学などの教育機関や教会<sup>8</sup>などで数を増やしていった。これはヨーロッパでも同様の動きであり、シュニットガー (Arp Schnitger) オルガンなどネオバロック化してしまったものをオリジナルに修

復されていった流れと、傾向を一にしている。この点ではドイツでは新築のオルガンが、ネオバロックからフランス19世紀のカヴァイエ=コル（Aristide Cavallé-Coll）を意識したロマンティック・スタイルへと傾向を変えていった流れと同様に、日本ではサントリーホールはじめとして、シンフォニーホールを中心とした大規模なオルガンは、それまでのネオバロック・スタイルのものからロマンティック・スタイルも加味したものに变化していった。また、フランスやオランダ、イタリアなど各国の特徴を生かした多様なオルガンの設置も進んでいる。

このようなオルガンが活用される場としては、教会、コンサートホール、大学などの教育機関が主要な施設であるが、特にコンサートホールの場合には、宗教上・音楽上の必要性が設置の根拠にあったというよりは、パイプオルガンの外観の華やかさが、施設全体の豪華な雰囲気の演出に役立つといった価値が重視されてきたことは否めない。それでも、パイプオルガンに対する物珍しさや、大空間で奏でられる壮大な音楽には感動を誘われるといった側面から、パイプオルガンは人々のコミュニケーションのメディアとして一定の役割を果たしてきたことは間違いない。設置されたパイプオルガンにはそれぞれ専属オルガニストを置きながら、オルガンのコンサートばかりでなく、公開講座や一般向けのオルガン・レッスンが実施され、人々の関心を集めていった。もっとも、多くの公共施設は地方自治体の財政縮小傾向の中でマネジメントの必要性が問われるようになり、指定管理者制度やPFIなど新たな手法を導入することで、経営の効率化が図られるようになってきている。こうした財政的・政治的变化の中で、特に社会的背景を持たない公共ホールのパイプオルガンは次第に顧みられなくなり、人々の関心も失われてきているのが現状である。

そこで、次にあげる2つの事例から地域コミュニティにおいてパイプオルガンが担う役割について考えていきたい。

## 4、事例研究

### (1) 伊丹市立サンシティホールの事例

1990（平成2）年4月に設立された兵庫県伊丹市立サンシティホールは、老人福祉法<sup>9</sup>による施設で、年間20万人以上の高齢者をはじめとする市民が利用し、高齢者らのクラブ活動<sup>10</sup>も盛んに行われてきた。1階の多目的ホールと呼ばれるロビースペースには、1993（平成5）年6月にベルギー製のパイプオルガンが設置され、月2回の無料オルガンコンサートや無料体験教室も開催されてきた。パイプオルガンがホールに導入される場合、通常は音楽専用ホールに設置されるが、伊丹市では2つある音楽専用ホールではなく、高齢者と若者が触れ合うことができる憩いの場としての目的をもつ多目的ホールへの設置となった。これは、当時の市長で、無類の音楽好きの矢笠興一氏の強い思いから実現したもので、姉妹都市（ハッセルト）があるベルギーのシューマツハ社製のものが選出された（図表1を参照）。

もっとも急速な高齢化が進展する中で、その役割も文化施設から老人福祉センターへと移行し、高齢者の健康寿命を延伸するための自立生活支援を目的とした事業を重点とした施設に大規模改修されることが決定した。そこで問題となったのが、設置当時7,000万円をかけて導入したパイプオルガンである。このパイプオルガンは図表1に示すようにパイプ数1,696本を持つ大型のものである。パイプオルガンには定期的なメンテナンスに加え、15～20年に一度の大規模なオーバーホールが必要とさ

れるが、このような大型の楽器となると通常全面的オーバーホールには一千万単位の費用がかかる。しかし、こうした修繕費用の予算を計画的に計上してこなかったこともあり、ホールの大規模修繕と存在目的の変化を理由として、入札で譲渡する方針を固めた。入札自体はゼロでも構わないが、実際には解体・搬出・再設置・移送費用、メンテナンスなどでかかる数千万の費用は譲渡人が負担することになる。このサイズのパイプオルガンが入るのは、学校、教会、コンサートホールなどに限られる。

楽器というのは音楽を奏でる道具として奏者と共に成長していく側面がある。これは、弦楽器や管楽器・打楽器でも同じで、一流の奏者による演奏はそれだけで楽器のコンディションを整える役目も果たしている。オルガンは吹奏楽器であることからパイプに空気を送る「弾きこみ」<sup>11</sup>が必要である。サンシティのパイプオルガンが設置されているのはロビーのような多目的ホールのため音楽以外の利用も多い。「年間のオルガンコンサートも3回にとどまるし、オルガンスクールも開催されていない。…プロムナードコンサートを除けば、週1回、夜間に各3時間、6名の専属オルガニストたちが『弾きこみ』練習のために利用しているにすぎない」<sup>12</sup>という記述からもうかがえるように、税金を使って購入した高額なパイプオルガンが十分に活用されてきたかは不透明である。それでも、多くの市民がこの高齢者施設でのパイプオルガンの演奏を楽しみに集い、高齢者施設の在り方として高齢者ばかりでなく若者も同時に集うという理想的な空間を創造してきたことは意義深い。

サンシティホールの運営は、指定管理者である公益社団法人伊丹シルバー人材センターが請け負ってきた。まず運営主体のシルバー人材センターには、伊丹市の他のホールとは異なり、音楽事業の専門スタッフはおらず、市の他の音楽事業とは切り離されていた。更に、楽器のコンディションを最適にするためには専門家の関与が不可欠であるが、これまでオルガン製作者や奏者などの専門家が伊丹市に修理の必要性を要求してきたにも関わらず、高額であることを理由にサンシティのパイプオルガンにはこれまで適切な修理が実施されてこなかった。こうした経緯もあって楽器のコンディションが芳しくないこともあり、2020年3月に公示され6月5日に予定されていた公募型プロポーザルの入札では譲渡先が決まらなかった。そこで継続して譲渡先を募集するために、伊丹市広報課ではHPでの情報提供ばかりでなくTwitterなどのSNSも使って広く呼びかけてきた。市民や専属オルガニストか

図表1 サンシティホールとホテル日航福岡のパイプオルガン概要

|       |                                     |   |
|-------|-------------------------------------|---|
| 所在地   | 伊丹市中野西1丁目148番地<br>(伊丹市立サンシティホール内1階) | 福岡県福岡市博多区博多駅前2丁目18-25<br>(ホテル日航福岡 新館3階) |
| 設置年   | 1993年6月                             | 1998年11月                                |
| 製作    | Schumacher Orgelbau(ベルギー)           | Alfred Kern et Fils(フランス)               |
| 設計    | Guido Schumacher                    | Daniel Kern, J.-J. Guénelo, 池田泉         |
| 組立て   | n.a.                                | Alfred Kern、ヤマハ(株)                      |
| 整音    | n.a.                                | Daniel Kern                             |
| ストップ数 | 29 Stops                            | 33 stops                                |
| パイプ本数 | 1,696本                              | 約2,400本                                 |
| 高さ    | 約7m                                 | 約6m                                     |
| 幅     | 約5.8m                               | n.a.                                    |
| 奥行    | 約3.8m                               | n.a.                                    |
| 重量    | 約9t                                 | n.a.                                    |

出典：各施設及び関連業者のHPを参照

らは惜しむ声も多いが、ホールの大規模修繕が行われる2021年までには、有効活用してもらえらる譲渡先を決めなければならない。高齢者施設のパイプオルガンという理想的ではあるが見方によれば贅沢な装置が、伊丹市から失われることになる。

## (2) ホテル日航福岡の事例

1989年7月に開業したホテル日航福岡（福岡市博多区）には、1999年2月に新館が開設され、ここには建物の顔となるチャペルプリエールというキリスト教式教会がある。延床面積3,366m<sup>2</sup>、天井高12メートルのこのチャペルは本格的なゴシックスタイルを目指し、壁面はフランス産のライムストーンを採用、チャペルの特徴である13面の陽の光の変化を表現した自然光が入らないステンドグラスはフランスのピトラユ社製、ボード天井は肉厚石膏で製作され、ゴシックスタイルの本物の技術と材料により、荘厳な雰囲気を醸しだしている。このチャペルに、パイプ数約2,400、33音色を奏でることができる挙式用としては西日本最大級のパイプオルガンが設置されている。フランスのアルフレッド・ケルン製で、ダニエル・ケルン氏、ジャン・ジャック・ゲネゴ氏、池田泉氏により設計<sup>13</sup>された（図表1を参照）。結婚式では、教会内に響きわたるパイプオルガンの音と共に、この空間で主役となる新婦のウェディングドレスが際立つような照明が工夫されており、感動的な結婚式を演出している。挙式見学に来るカップルはチャペルでのオルガン演奏を視聴すると、その雰囲気に感動して、ほぼ100%に近い高確率で式の仮予約を入れるという<sup>14</sup>。こうしたチャペルを持つホテル日航福岡は、福岡では無敵の結婚式場となっており、パイプオルガンが本体ホテルの売上にも大きく貢献してきた。

もちろんチャペルでは結婚式だけが行われているわけではない。専属オルガニストでミュージック・ディレクターでもある池田泉氏は、レクチャー付きのオルガンコンサートをはじめ、プロのチャペル専属合唱団「コレギウム・プリエール」（聖歌隊）・合奏団を率い、2019年7月までに200回の定期公演を開催してきた。会員制のコンサートクラブも組織し、120名収容するチャペルの客席は常に満席である。朝日カルチャーセンターなどとも連携し、アマチュアの音楽活動も盛んな福岡市の聴衆育成にも貢献してきた。

飾りとしての電子オルガンが多く使われている我が国の結婚式場において、本格的に導入されたこのパイプオルガンは、響きや雰囲気を醸しだすための建築物の一部として多額の費用を投じられ完成したが、20年経過した2019年には全面的なオーバーホールも実施され、楽器としての機能が最大限に活かされるような丁寧なフォローも行われている。挙式をあげた花嫁や家族は荘厳なチャペルの雰囲気と壮大なオルガン演奏に必ず涙するというこのチャペルは、費用対効果の側面からも、本体のホテルばかりでなく、地域への文化的貢献の大きさは計り知れない。これは、長期的なビジョンのもとで地道な音楽活動が継続されてきた結果でもある。

## 5、2つの事例から導かれるパイプオルガンの存在意義と地域コミュニティにおける役割

パイプオルガンには多額の資金が必要とされるが、そればかりでなく定期的なオーバーホールや維持運営のための経費がかかることを前提として導入されるべきであることが理解される。この点、さ

して強い理念を掲げずにバブル景気の中で導入してきたパイプオルガンについては、昨今のスリム化を進める地方自治体において維持運営していくことは容易でないこともわかる。もっとも、諸事情によりパイプオルガンを維持することができなくなっても、日本ではこうした楽器の中古市場が存在しない。欧米では、建て替えや買い替えなどで中古のパイプオルガンを移設することは稀ではなく、ストラディバリウスやアマティなどの弦楽器と同様に、持ち主を変えながら何百年も存在し続けてきている。理念を持たずに導入した設置者側に問題もあるだろうが、我が国で今考えるべきことは、こうした不要となった楽器をどのように有効利用していくか、という点である。楽器は音楽という完成された芸術作品を聴衆に伝えるメディアであり、家具と同じように捉えて古くなったから廃棄するというものでもない。手をかけ手間をかけた高価なパイプオルガンなら、尚更のことである。パイプオルガンは、人々の心に安らぎを与え、奏でる音楽に集ってくる人々の社交の機会を創出し、地域の元気に結びつけることができる楽器である。大型楽器として建造物との不可分性により、パイプオルガンが奏でられるところにはこうした「場」が提供されることは、地域の人々のコミュニケーションを促進する上でも大いに意義のある点である。

ただ、パイプオルガンを地域コミュニティの中で有効に使うことができているかについては、現状では明らかに濃淡が生じていることも事実である。優れたオーケストラには優れた指揮者や音楽監督が必要とされるように、多くの機能を持つ大型パイプオルガンには優れた奏者や、その楽器をうまく使った音楽活動を企画するプロデューサーが必要とされるためである。パイプオルガンにとっては、専属オルガニストの役割は大きい。本来であれば、長期的なビジョンに基づき、地域コミュニティの聴衆を育成することも、専属オルガニストの重要な役割である。もっとも、全国各地にあるパイプオルガンの専属オルガニストは、必ずしも音楽大学出身のプロフェッショナルなオルガニストとは限らず、教会の信者の中からピアノを弾けるという理由で抜擢されることも少なくない。パイプオルガンに関する知識を十分に持たないアマチュア演奏家が専属オルガニストとして従事することで、小さい教会内の需要は満たすとしても、パイプオルガンを設置している場合には楽器としての機能を十分に活かすことができないばかりか、楽器の寿命を短縮させてしまっている事例も多いのかもしれない。

世界各国によりオルガニストの養成状況は異なるが、図表2に示すように例えばドイツ語圏では教会音楽家 (Kantor) という職名で、資格制度が整備されており、オルガンの演奏ばかりでなく、礼拝用のオルガン即興、合唱やオーケストラの指揮、声楽、ピアノなどを対等の専門科目とする教会音楽科で学び、教区の音楽監督を目指すというキャリアパスが確立している<sup>15</sup>。オルガニストはプロの演奏家であると同時に、幅広い知識と実務を兼ね備える音楽プロデューサーであり、収入を伴う社会的な地位も確立していることから、地域の音楽振興に関する意思決定において絶対的な発言力がある。一方で、日本ではあまりに多くのパイプオルガンが設置されており、これらは音楽大学オルガン科出身で十分な専門的知識を備えたオルガニストの数を遥かに超え、実際には玉石混交の専属オルガニストが楽器の保守整備にも関わっている。我が国では教会オルガニストは無給のボランティアであることから、オルガニストという職業にプロフェッショナルとしての誇りや自覚を要求することは難しいという側面も否めない。ただ、公共施設運営の現状を鑑みると、入れ替わりの激しい行政の担当者や指定管理を請け負う業者に、こうした専門的な知識を要求することが難しいのは至極当然でもある。一方で、専属オルガニストの育成環境が充分ではなく、プロの演奏家としての社会的立場が曖昧であ



図表2 オルガニスト養成制度

|                | ドイツ語圏<br>(ドイツ・オーストリア・スイス)<br>及び北欧                               | 日本                               | ラテン語圏<br>(フランス、スペイン、イタリ<br>ア)及び英国 |
|----------------|---|----------------------------------|-----------------------------------|
| 職名             | 教会音楽家   | オルガニスト                           | オルガニスト                            |
| しごと内容          | 教会での合唱、オーケストラ、吹奏楽の指揮、オルガン演奏                                     | 教会、コンサートホール、大学等教育機関でのオルガン演奏      | 教会でのオルガン演奏(合唱指揮とは分業)              |
| 音楽大学での専攻名      | 教会音楽科   | オルガン科<br>(全国で約20校)               | オルガン科                             |
| 学部 専門科目        | オルガン、礼拝用オルガン即興、合唱オケ指揮、声楽、ピアノ                                    | オルガン                             | オルガン                              |
| 主な必修科目         | 楽典、キリスト教学の科目(新約聖書、旧約聖書、などの聖書神学、礼拝学、教義学などの組織神学、教会史、教会音楽史などの歴史科目) | 楽典、和声、音楽史等                       | 楽典、和声、音楽史等                        |
| オルガニストとしての資格制度 | 教会音楽家(Kantor)資格制度(A,B,C)に基づくフルタイム、ハーフタイム、パートタイムのプロフェッショナル       | 特になし<br>音大オルガン科出身でなくても、ピアノが弾ければ可 | 音楽大学出身                            |
| 報酬             | 俸給段階制度により明確   | 無報酬(教会)                          | 報酬有(但しパートタイム)生活には副業が必要            |

出典：聴き取り調査による<sup>16</sup>

り、更に発言権もないという状況であれば、多額の資金を投入したパイプオルガンという楽器の価値を十分に活かし、世代を超えて末永く活用されていくことが難しくなってしまう危険性も孕んでいる。地方の文化行政に課題がないというわけではないが、より現実的な課題として、特に公的資金が投入されて設置された我が国のパイプオルガンを、楽器としての価値を上げながら大切に使用し続けることが求められている。こうした状況を作り出すためには、オルガニストのしごと能力の育成に関しても課題がある。音楽的な専門知識を持つ演奏家としてのみならず、ホール運営に対する政治力や地域の文化資本を高めるような企画力も兼ね備えたプロデューサーとしての包括的能力を有するアーティストとして養成するためにも、オルガニストのキャリアデザインの構築については改めて考えていく必要があるだろう。

## 6、おわりに

我が国では、権威を象徴するようなパイプオルガンの荘厳かつ装飾的美しさから、非日常空間の演出といった建造物としての意図は十分に機能してきたが、特に税金が投入された公共施設におけるパイプオルガンの必然性についてその設置根拠を提示することは容易ではない。現に哲学もなく必然性もないまま、隣接地域との競争意識の中でこぞって高額なパイプオルガンが購入されたために、地域の人々の交流の場として機能するよりは、税金を浪費する厄介物として捉えられているケースも多いのが実情である。こうした中で、2020年のサンシティのパイプオルガンの移設問題は、地域におけるパイプオルガンの役割について、我々に大きな示唆を与えてくれている。更に、ホテル日航福岡のチャ

ペルプリエールに見るように、地域コミュニティの中で場を提供することの大切さを十分に理解した上で、長期的ビジョンを伴い企画された音楽環境を創出するのであれば、パイプオルガンは決して高い買い物にはならず、経済効果を創出する媒体にすらなり得ることがわかる。電子化された時代であるからこそ、アナログな音楽は我々の心を癒してくれる。そこに必要とされているのは、「楽器」という音楽を奏するための道具を生かす「人」であり、音楽と楽器と建物内部の空間を有機体として捉えつつ人々の心をつなげていく「オルガニストのしごと」ということになる。

本稿では、我々が日頃から目にするようなメジャーなコンサートホールや公共施設ではなく、地域創生につながる可能性を示唆するために、敢えて小規模の施設におけるパイプオルガンの事例を取り上げた。もちろん、こうした事例が全てではなく、パイプオルガンがコミュニティにおけるメディアとして有効に機能するための検証には、更に多くの事例研究を進めていく必要がある。また、本研究では十分に検討することができなかったが、ともすると楽器の特殊性ということを盾に社会や他の音楽家集団から孤立しがちなオルガニストという職業の人材育成についても、各国の状況を詳細に把握する必要がある。これらについては、今後の研究課題としたい。

## 謝辞

本研究はJSPS科研費16H03663の助成を受けたものです。なお本稿の執筆にあたっては、ホテル日航福岡のミュージック・ディレクター池田泉氏に多大なご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。

## 参考文献

- Jakob, F. (1977) Die Orgel. Mainz et al.: Schott.
- Lohmann, L. (2019) 「ドイツにおけるオルガン演奏の現状について」『Japan organist』46, pp.1-6.
- 赤井励 (1995) 『オルガンの文化史』青弓社.
- 秋元道雄 (1982) 『パイプオルガンの本』東京音楽社.
- 秋元道雄 (2002) 『パイプオルガン：歴史とメカニズム』ショパン.
- 一般社団法人日本オルガニスト協会監修、松井直美・廣野嗣雄・馬淵久夫編 (2019) 『オルガンの芸術：歴史・楽器・奏法』道和書院.
- 木村佐千子 (2010) 「ドイツ語圏の鍵盤音楽 (1)：中世からウィーン古典派まで」『獨協大学ドイツ学研究』63, pp.1-102.
- 草野厚 (2003) 『癒しの楽器パイプオルガンと政治』文藝春秋.
- 社団法人全国公立文化施設協会編 (2007) 『[新版] 公立文化会館運営ハンドブック』社団法人全国公立文化施設協会.
- 辻宏 (2007) 『オルガンは歌う：歴史的建造法を求めて』日本キリスト教団出版局.
- 日本オルガン研究会 (2010) 「第7回日本オルガン会議報告書—オルガンの未来を考える 2010」『オルガン研究』第38巻, pp.113-162.
- 村田信義 (1983) 「パイプオルガンと演奏ホール」『日本音響学会誌』39巻6号, pp.414-423.
- 丸山高広、森秀人 (1999) 「ホテル日航福岡新館／チャペルプリエール」『照明学会誌』83巻9号, pp.728-731.
- 横山正子 (2011) 「オルガン建造の背景—イングランドの例を中心に」『桜美林論考 人文研究』第2号, pp.139-159.
- 吉川茂 (1991) 「パイプオルガンの音響学」『日本音響学会誌』47巻11号, pp.834-843.
- 朝日新聞 2019年1月23日 朝刊 福岡 27ページ  
「パイプオルガン、巨体の中は 博多のホテル、20年経て仏職人ら分解点検」

朝日新聞 2020年7月3日 夕刊 11ページ

図表3 日本のパイプオルガン

| 所在地  | 数   |
|------|-----|
| 北海道  | 56  |
| 青森県  | 8   |
| 岩手県  | 5   |
| 宮城県  | 29  |
| 秋田県  | 6   |
| 山形県  | 12  |
| 福島県  | 7   |
| 茨城県  | 11  |
| 栃木県  | 12  |
| 群馬県  | 8   |
| 埼玉県  | 30  |
| 千葉県  | 22  |
| 東京都  | 299 |
| 神奈川県 | 87  |
| 山梨県  | 16  |
| 長野県  | 16  |
| 新潟県  | 12  |
| 富山県  | 2   |
| 石川県  | 9   |
| 福井県  | 2   |
| 岐阜県  | 21  |
| 静岡県  | 17  |
| 愛知県  | 43  |
| 三重県  | 3   |
| 滋賀県  | 3   |
| 京都府  | 19  |
| 大阪府  | 49  |
| 兵庫県  | 65  |
| 奈良県  | 1   |
| 和歌山県 | 0   |
| 鳥取県  | 1   |
| 島根県  | 3   |
| 岡山県  | 14  |

|      |      |
|------|------|
| 広島県  | 36   |
| 山口県  | 7    |
| 香川県  | 8    |
| 徳島県  | 3    |
| 愛媛県  | 6    |
| 高知県  | 2    |
| 福岡県  | 30   |
| 佐賀県  | 3    |
| 長崎県  | 18   |
| 熊本県  | 11   |
| 大分県  | 5    |
| 宮崎県  | 7    |
| 鹿児島県 | 7    |
| 沖縄県  | 2    |
| 合計   | 1033 |

出典：武田高太郎氏調査による「オルガンの所在地一覧」<sup>17)</sup>を参照

「大型パイプオルガン譲ります」兵庫・伊丹市、維持費高く「家具じゃない」音楽関係者ら批判」  
朝日新聞デジタル 2020年7月5日  
「7千万円のオルガンは不要家具か？ ハコモノ行政の果て」(中塚久美子)

## 添付資料

### 注)

- <sup>1</sup> [新版] 公立文化会館運営ハンドブック p.7.  
[https://www.zenkoubun.jp/publication/pdf/afca/art\\_hb2007.pdf](https://www.zenkoubun.jp/publication/pdf/afca/art_hb2007.pdf). (2020.8.10参照)
- <sup>2</sup> 日本オルガン研究会 (2010) 『オルガン研究』 p.118.
- <sup>3</sup> 同上。
- <sup>4</sup> 木村 (2010)
- <sup>5</sup> Jakob (1977) p.15.
- <sup>6</sup> アレクサンドリアの技師Ktesibios (ca. 283-246 v. Chr.) による (Jakob (1977) p.11)
- <sup>7</sup> 木村 (2010)
- <sup>8</sup> 教会に設置されたものには小規模なオルガンも多い。
- <sup>9</sup> 老人福祉施設とは老人福祉法 (昭和38年法律第133号) を根拠としており、その中の一つとして老人福祉センターがある。老人福祉センターは、地域の老人に対して、各種の相談に応ずるとともに、無料 (又は低額な料金) で、老人に対し健康の増進、教養の向上、レクリエーションのための便宜を総合的に供与することを目的とする施設である。特A型、A型、B型があり、A型を基本として特A型は保険関係部門を強化した施設、B型はA型の機能を補完する施設である。2010年実績で、全国の老人福祉センターは2,228箇所 (特A型267, A型1,527, B型434) で

ある。(出典：厚生労働省大臣官房統計情報部「社会福祉施設等調査」)

- <sup>10</sup> 主な構成員が60歳以上のグループは、音楽室、講座室などの専用使用が無料。
- <sup>11</sup> 定期的に演奏されていれば、敢えて「弾き込み」と呼ばれるような作業を依頼する必要はない、ということにもなる。
- <sup>12</sup> 草野 (2003) p.68.
- <sup>13</sup> ジャン・ジャック・ゲネゴ (Jean-Jaque Guénégo) は長年ケルン社でパイプオルガンの (内部メカニックを含む) 設計を担当してきた。音色の構成仕様は池田、太さ・歌口・足元などパイプの仕様及び吹子など風圧関係の設計仕様はケルンとゲネゴ、整音はケルンと、音作りは共同作業により進められた。(池田泉氏談)
- <sup>14</sup> 実際には、披露宴などを含む費用総額が高額であることから、最終決定する割合は30-50%に留まっている。
- <sup>15</sup> もっともドイツでも、1990年代以降教会脱会の波が高まり、相次いで教会が閉められ、教会音楽家の多くのポストが廃止されている。(Lohmann 2019)
- <sup>16</sup> ドイツとの違いを示唆したもので、必ずしも各国状況を網羅しているものではない。
- <sup>17</sup> 掲載者ご本人の了解を得て、都道府県別にカウントしたものである。但し個人所有は含まず、2020年8月参照時点においても、存在する全ての楽器を網羅しているものではないことを付記しておく。  
<http://www5b.biglobe.ne.jp/~organ-ex/shozaiti/shozaiti.htm> (2020.8.15参照)

## The role of pipe organs as a medium from a community perspective

OKI Yuko

### **Abstract**

Pipe organs started to become popular in Japan during the 1980s, but these large and expensive instruments especially in the public sectors have become the subject of much criticism. This paper will discuss and examine how pipe organs can play an important role as a medium in the local communities, while maximizing their value as musical instruments. In this study, two cases were selected : Sun City Hall in Itami city and Hotel Nikko Fukuoka in Fukuoka. These two cases were analyzed based on public materials and interviews with the relevant parties concerned.

As a result of the research, clearly, to install a pipe organ is not only a very expensive investment, but also a considerable cost is incurred in the maintenance and repair of it. Therefore, professional involvement and relevant authorities are necessary in order to take full advantage of pipe organs functions. These instruments are extremely difficult to relocate once installed. In this way, pipe organs will flourish as instruments while at the same time maintaining as communication connection with the local community as a medium for the first time.

**Keywords** : local community, concert hall, Kantor (cantor), organist, producer